

私の幸せ

弘前市立南中学校

対馬 蘭

対象作品／住野よる著『また、同じ夢を見ていた』双葉社

「幸せは、あっちからやつてくるものではなく、こっちから、選んで手にするものだから。」

主人公である友達がない「私」は、尻尾の短い猫の「彼女」と共に、綺麗なお姉さんの「アバズレさん」、笑顔の素敵なおばあちゃん、手首に傷のある高校生の「南さん」に助言をもらいながら、国語の授業で、幸せとは何かについて考えていく。

授業参観日が近づき、自分のかしこい様子を両親に見てもうと楽しみにしていた「私」だったが、両親共に仕事で行けなくなってしまったことを、母から伝えられる。思わず母を傷つける言葉を言ってしまった。次の日「南さん」にそのことを話すと、返ってきた答えは「謝れ」。もう一度と親に謝ることのできなくなつた「南さん」は、自分を「私」に重ねていた。

私は、その時すぐに母に謝ることのできなかつた「私」を、

なんてわがままなのだろうと思つた。
では、私自身はどうだらう。

この本を読む前の私は、他の人たちよりも自分の方が「優秀」だと思っていた。私の思う「優秀」とは、テストの点数が高い、字が綺麗、絵が上手、足が速い……。私がこのように思い込むようになった理由はたった一つ。大人にほめられるから。ほめられる人は「優秀」。この自分の中だけの「優秀」が、私は全て当てはまつていた。私の幸せとはと問われたら、自分の「優秀さ」だと、胸をはつて答えていただろう。私はよく、感情まかせにものを言つてしまつことがある。

最近では母に、「お母さんは一度と一緒に出かけない！」と言つた。母は私にこう返した。

「お母さんはそれでもいいけど、もしお母さんが死んで本当にそうなつたら、悲しむのはあなただよ。」
と。その時私は、それは嫌だと思った。私は本当に母と出か

けたくないわけではない。ただ、母を少し困らせたかつだけだ。こんなちっぽけな反抗、一言謝れば済むことだ。しかし私は、たったそれだけのことができなかつた。私は思う。こんなことも謝ることのできない私は、人として「優秀」なのだろうか。

さて、クラスメイトにバカにされ、不登校になつてしまつた隣の席の「桐生くん」の家に行き、自分は味方だ、一緒に戦おう、と「私」は言う。しかし戦おうとしない彼に「いくじなしつ！」と怒鳴ると、「嫌いだ！皆、嫌い！」だけど小柳さん（「私」）が一番嫌いだ！と言われてしまう。この言葉に心が真っ暗になつてしまつ、「私」と共に、私も心が真っ暗になつた。なぜなら、自分が「一番嫌いだ！」と言われた気分になつたからだ。

私は、小・中学校どちらも眞面目に部活動に取り組んだ。それはとても「優秀」なことだと思っていた。生徒会長や部長になり、私のそういう意識は、より強くなつていつた。ある日の部活動中、顧問の先生に言われた。

「お前、自分が他の人より優秀だと思つていいだろ。」

図星だった。しかし、まさか、それが人を見下すような態度にまで出ているとは思いもしなかつた。それから私は先生に、何度も同じようなことを言われた。私は苦痛だつた。こんなにも自分が否定されたことはなかつた。もう逃げ出した

くて、逃げ出したくて、たまらなかつた。そして、ある時先生に言われた。

「あなたは何でもできるわけじゃない。何でもできる人はいるんだ。だから自分のできることをすればいいんだよ。」

と。私は解放された気分になつた。

自分も「一番嫌いだ！」と言われたような気分になつたのは、私も「私」と同じように人を見下していたからだ。私の考えていた「優秀」は、間違つていたのだ。逆に、自分を苦しめてしまつっていた。私はそう思った。

私は、何年も「優秀」ということについて間違つた考えを持ち続けていたことに気づくことができた。私の今の幸せは、この間違いに気づけたことだ。

幸せとは、自分が嬉しく感じたり、大切な人を大事にしたり、自分のことを大事にしたり、そういう行動や言葉を、自分で選べることだと、この本を読んで気付くことができた。そして、「アバズレさん」や「南さん」「おばあちゃん」のように、私の周りにも幸せについて教えてくれる人達がいる。私はまた間違つてしまふかもしれない。しかし、それを乗り越えながら、私自身の幸せを見つけていきたい。そして、いつか私も、今の私のように間違つてしまつた人を幸せへと導いてあげられる人になりたい。